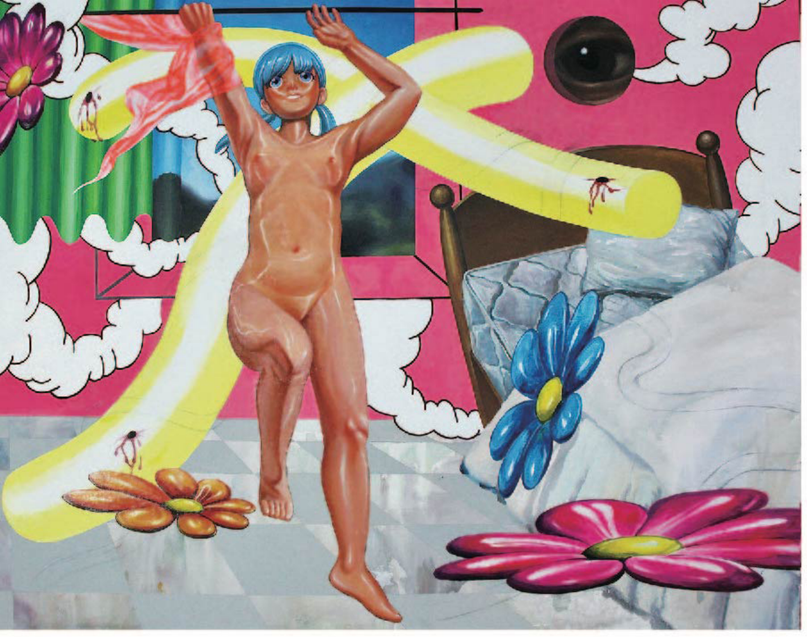
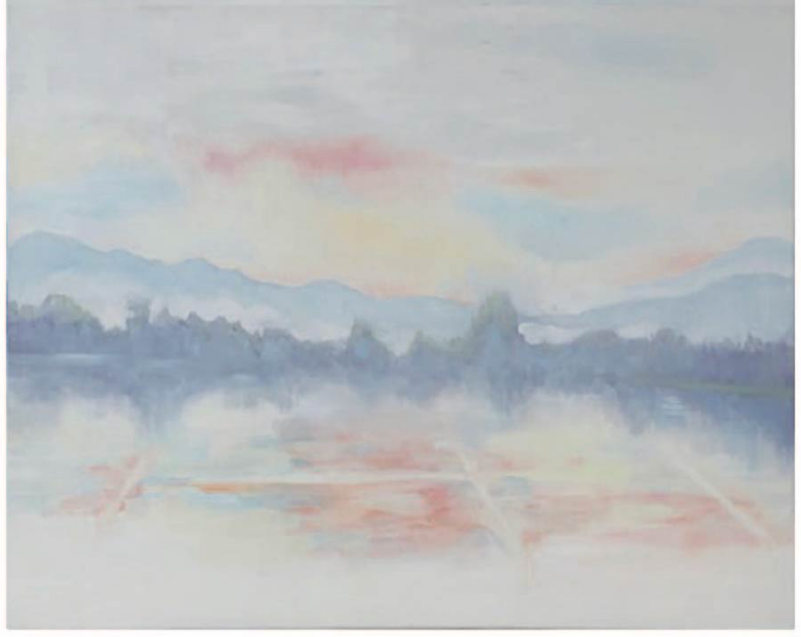
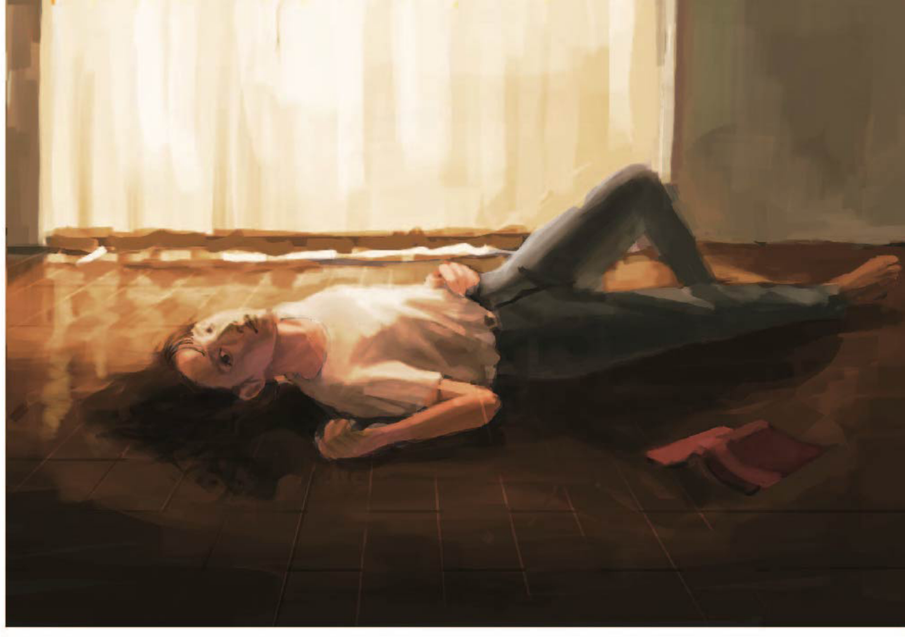






voir / savoir II

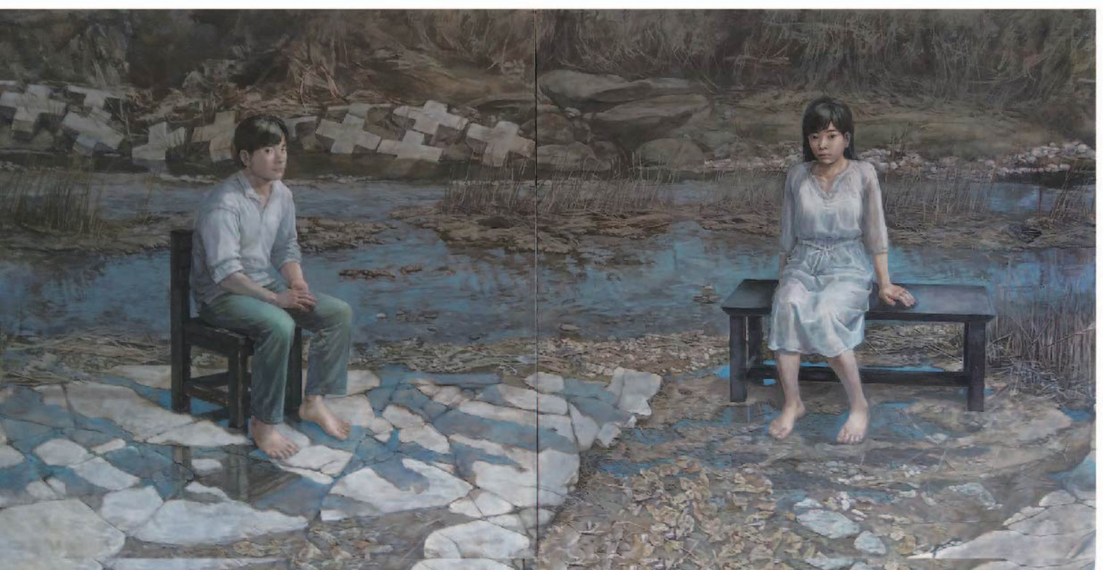
見ること / 知ること

金沢美術工芸大学 油画専攻 大森ゼミ

ASADA Ryouichi
TOHYA Miki
NAKAI Rin
MIYASHITA Kazuki
YAMADA Michiko
WATANABE Haruka
ARISA Ryouhei
KOSAI Akane
TSUTSUMI Chiharu
MATSUMOTO Gen
OHMORI Akira

2020年8月21日fri～30日sun

a.m11:00～p.m6:00 定休日／水曜 ガレリアポンテ Galleria Ponte



Galleria Ponte
ガレリア ポンテ

voir / savoir II

見ること / 知ること

金沢美術工芸大学 油画専攻 大森ゼミ

2020 年 8 月 21 日 fri ～30 日 sun

a.m11:00～p.m6:00　定休日／水曜

浅田　涼壱　（油画専攻４年）
遠矢　実樹　（油画専攻４年）
中井　輪　　（油画専攻４年）
宮下　芳月　（油画専攻４年）
山田美智子　（油画専攻４年）
渡邊　春佳　（油画専攻４年）
有佐　瞭平　（油画専攻３年）
小佐井あかね（油画専攻３年）
堤　千春　　（油画専攻３年）
松本　弦　　（油画専攻３年）
大森　啓

堤	小佐井	宮下
	遠矢	渡邊
		松本
浅田	中井	有佐
山田	大森	

Statements

浅田涼壱（４年）
「supply」 1120mm×1620mm　キャンバスに油彩　（制作途中）
　終末世界に憧れがあり、それをテーマに制作を行ってきた。非日常の中にある日常とは何だろうかと思ったときに浮かんだのが食事に関する事柄、特に食料の調達だった。
　コンビニという日常空間と、そこでのサバイバルという非日常を描いた。

遠矢実樹（４年）
「回想」 1620mm×1120mm　キャンバスに油彩　（出品作と異なります）
　（出品作について）昨年度から作品のテーマとしてきた「時間的、空間的な隔たりと回想」をもとに制作しました。モチーフはチューリップ畑とその向こうにいるベビーカーに乗った従姉妹です。私の中に昔からある「今この瞬間自分がこの場所にいるのに、どこか遠くから俯瞰しているような気持ちにもなる」という、現在と回想が入り混じるような感覚を表現したいと思いました。☒

中井　輪（４年）
「Amusement Park」 138mm×205mm　紙にインクジェットプリント
　確かに、伝えられる内容が的確に伝われば伝わるほど、作品は意味の豊かさを失うだろう。だが、伝えられる内容が反語である場合、その限りではない。

宮下芳月（４年）
「憧れ（習作）」 1620mm×1120mm（本作品）　キャンバスに油彩
　私は昔から、水であったり沈ませる媒体に対して強い憧れを持っていました。床は身近な海だと私は思っていて、暑いとき、疲れたとき、そこに身を投げたい、と言う自分の願望を反映させたのが今作品です。床面下に見えるのは自分の影であり、また第二の自分でもあり、メタモルフォーゼするというような想像をしてもらえたらいいなと思っています。

山田美智子（４年）
「涸川と箱庭（左：隙間 右：休息）」 1620mm×3240mm　パネルに油彩
　私は、人間は皆主観を通してしか世界を見られず、絵画として表されたあらゆる図像も作者の思考の再現としてのみ存在すると考える。そこで今回の作品で、自分にとっての世界を考え、図像にしてみようと考えた。そして、完全な客観世界がその存在自体虚像であるという考えの比喩として水を取り入れ表現しようと試みた。また、これらの２枚は左右を入れ替えても繋がるようにし、自分の脳の外には出られない、袋小路の世界の比喩として用いた。

渡邊春佳（４年）
「ジャングル探検」 530mm×455mm　ボードにアクリル　（出品作と異なります）
　自分の中で一番わくわくする世界観を画面に表現したい。そして、願わくばこの気持ちを誰かと共有したいという想いがある。自分だけではなく、鑑賞する人にとっても、どこか共感できて、なんだか楽しくなれるような作品を目指し、制作を続けていきたい。

有佐瞭平（３年）
「圧搾」 1170mm×1170mm　キャンバスにアクリル
　人は人の顔に対して、繊細に観察し感情を読み取ろうとしたり、個体を識別しようとする。そういう意味で人の顔は人を引き付ける特別なモチーフだと思っています。私の制作では人の顔を用いて不安を感じさせる表現を模索しています。

小佐井あかね（３年）
「故郷」 727mm×910mm　キャンバスに油彩　（会場には作品写真を展示）
　私は大学に入ってから３年間、風景画を制作してきました。毎日変わる光や天気や色はいつ見ても飽きることはありません。また、私には描きたいと思える場所と人々との交流、思い出があります。それは留学してからも同じです。今回はナンシー市で描いた風景画の写真と、金沢の風景画を展示します。

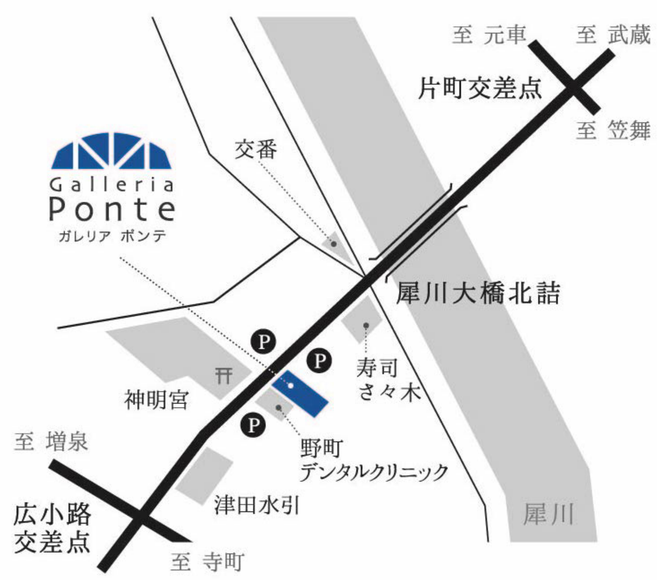
堤　千春（３年）
「alive monitoring」 910mm×1170mm　キャンバスにアクリル　（制作途中）
　私はよく、耐えがたい出来事から感情を抑圧し、不安感に支配されることがあります。その際、無意識に反社会・反道徳的衝動に駆られます。その不条理な感情を無機物 (金属、プラスチック)、有機物 (人間) に置き換え、描き方に差異をつけながらもキャンバスに並列することで、それらを等価なものとして描き (＝肯定し) ます。描くことにより無意識の感情を見つめ直し、攪乱しつつ冷静になろうとするエゴの存在を再確認します。不安感は軽やかになり、むしろ美的経験として受け入れ可能にできるということ作品を通して感じてほしいです。

松本　弦（３年）
「fomor」 1620mm×1300mm　ミクストメディア　（出品作と異なります）
　okomom

大森　啓
「Tetropolis」 910mm×1170mm　パネルにアクリル
　２年前の夏、ここガレリア・ポンテで第１回のゼミ展「voir / savoir 見ること／知ること」を開催、そのとき既に隔年での開催を決めていたので 2020 年の夏に「第２回展」の予約を入れました。しかし今年に入ってのこの新型コロナ禍。一時は休廊も余儀なくされたようですが、ギャラリーの感染防止に向けた様々な努力と日程調整のおかげで無事予定通りの開催に漕ぎ着けることができました。まずはオーナーの本山さんに心からお礼を申し上げます。
　フランス語で「見る」と「知る」を意味する「voir」と「savoir」。
　この（直接には関係がないとしても）不思議な繋がりを持つ二つの単語を冠した展覧会は、今まさに「見ること」と「知ること」、そして「描くこと」の意味を見出そうとしている若い作家たちの現在地を示します。
　３月以降、これまで当たり前のこととしてあった制作や研究、そして発表の場を失ったとき、それぞれ何と向き合い、何を見つけたのか。もちろん現在の状況を「よかった」などと言える要素は何一つありませんが、半ば強制的に自己と向き合わざるを得なかった彼らと彼女たちが絞り出した答えには、これまで以上の純度と強度が備わっているに違いありません。
　今後の状況が如何なるものであろうと、強くしたたかに描き続ける。そのための確認と展望の場、それが今回の「voir / savoir」です。

＊本展「voir / savoir 見ること／知ること」は金沢美術工芸大学油画専攻・大森研究室の学生（今回は４年６名、３年４名）による隔年開催のグループ展です。

【感染症対策と入店のお願い】
・マスクの着用と、入店時に店頭にて手指のアルコール消毒をお願い致します。
・発熱や咳、咽頭痛だるさや息苦しさなどの症状があるお客様はご遠慮いただいております。
・店舗内の入場人数を５名までに制限しております。（一時的に廊下にてお待ち頂く場合があります。）
・換気を重視し、扉や窓は開けたまま営業致します。
・お客様のご理解ご協力のほど宜しくお願いいたします。

Galleria Ponte
ガレリア ポンテ
〒921-8031
金沢市野町 1-1-44　宮本ビル１F
tel & fax 076-244 6229
galleria_ponte@nifty.com
http://galleria-ponte.art.coocan.jp/

［駐車場］
画廊並び左右に 100 円パーキング（１h100 円）がございます。日曜、祝日は画廊となりの野町デンタルクリニックさん駐車場をご利用ください。